

# 韓国USTと総研大との学術交流

2004年に開学した韓国の科学技術連合大学院大学(UST)は総研大がモデルになっているとも言われている。両校の間には、学生同士、学術面での交流が始まっている。

## 2回の相互訪問を実施

韓国のUST(University of Science and Technology)は、科学技術系の国の29の研究機関が共同で設立した大学院大学で、首都ソウルから高速鉄道で約50分の韓国第五の都市、大田(テジョン)にある。大田は、日本で言えばつくば研究学園都市に相当し、市内の研究団地には79の研究機関があり、2万人以上の研究者がいる。教育機関は、USTの他、理工系では韓国一の国立科学技術院(KAIST)など18大学がある。

USTでは、すべて英語で教育が行われる。修士課程、博士課程のほか、5年一貫制の統合コースがあり、498人の学生のうち153人を留学生が占める。各機関の研究員1134人が教員で、専攻は71

ある。

USTはその成り立ちから、設立当初から総研大と友好関係にあり、USTからの申し出によって学生の交流事業が開始されている。2009年6月には第一弾として、USTの学生6名が、日本の国立天文台を訪れた。また、同年11月には、総研大の学生7名がUSTを訪問。相互の研究・教育システムを紹介し合い、類似点や相違点を確認したり、抱える課題について直接話し合うまたとない機会を得た。そして、定期的な会合や学術交流など、将来のコラボレーションについても議論が交わされた。

天文科学専攻の松本尚子さんは、参加者の一人で、「総研大は日本の伝統的な大学院の仕組みになっているので、ある程度取る授業も決められてしまうが、

USTはテラーメイドで取りたい講義が取れることに魅力を感じた」と、そのときの感想を語る。

## 学生会が自主的に大学めぐり

学生の活動には大きな相違点がある。USTにあって総研大にないもの、それは全学的に組織された学生会の存在だ。そのミッションには大きく3つあり、学生と大学当局の間のネットワークづくり、学部学生に対する大学のPR、そして、学生間のイベントなどの企画・運営だ。

2回にわたる総研大との交流では、両大学の抱える共通の課題として知名度の向上があがったが、USTの学生会はここで一役買っている。入学希望者のためには、大学がキャンパスツアーを開催し



2009年11月、総研大生が韓国USTを訪問。オフィシャルな話題から、普段の生活まで幅広い情報を交換することができた。韓国文化は食事を大切にする。昼食や夕食では、韓国ならではの料理を楽しみながら笑いがはじける。

て、研究所を案内して見せているが、加えて、積極的に大学を回って、USTの説明会を開催しており、就職のための企業の説明会さながらだ。旅費などは大学からサポートを受けているが、まったく学生会の自発的な活動として実施されているという。

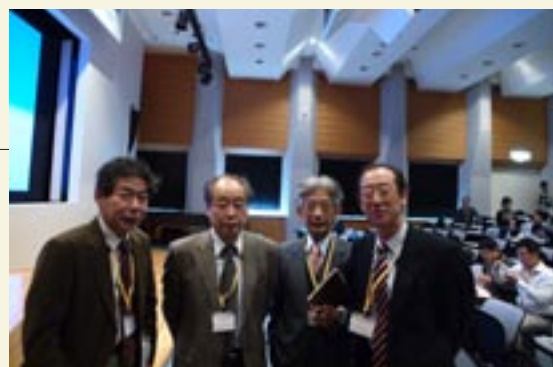
USTで医学物理学を専攻し、学生会で広報・渉外を務めるハ・テフン(Ha TaeHoon)さんに、大学のPR活動を聞いてみた。「USTは歴史が浅いため、学部学生への情報提供が十分ではない。大学本部は新聞などのマスメディアを通じて大学の存在をPRしているので、われ

## 総研大国際シンポジウム 総研大学術ネットワークの構築をめざして

総研大学術ネットワークの構築をめざす2回目の国際シンポジウムが、2009年12月14日から17日まで、葉山キャンパスで開催され、総研大の基盤をなす共同利用機関の教員や学生、海外で活躍する修了生など、11カ国から総勢166人が集った。

総研大は、国際的に通用する研究資質と広い視野を備えた人材の育成を教育理念としており、これまでに外国人を含む1265名の学位取得者を輩出。その多くは研究者として国内外で活躍している。こうした修了生を核にして、アジアを中心とする諸外国との学術ネットワークをさらに発展させる足掛かりとすることが、シンポジウムの狙いだ。

会議初日は、高畑尚之学長の開会の挨拶で口火を切り、次いで、ノーベル賞物理学者で総研大名誉教授(高エネルギー加速器研究機構:KEK・特別名誉教授)でもある小林誠氏の特別講演が続



国際シンポの会場で顔をそろえた高畑尚之学長(右端から順に)、組織委員長の湯川哲之教授、小林誠名誉教授、池内了理事。

いた。「CP Violation and B-factory Experiments」と題する講演は、受賞の対象となったCP対称性の話でもあり、参加者は熱心に耳を傾けた。

組織委員会委員長の湯川哲之氏(葉山高等研究センター先導科学研究科教授)は、「ノーベル賞学者と同じ総研大コミュニティの一員であることに誇りを感じたはずで、学術ネットワークを

築くための牽引力にもなる」と語った。

2人目の招待講演者は立命館アジア太平洋大学学長のモンテ・カセム氏。ネットワーク構築のための重要なポイントとして、①興味ある内容、重要な問題を扱う、②グローバルな考えをもって地域での活動を進める、③ITを活用する、④困難の中に楽しみをもてるものとする、という4点を強調した。

その後、学術交流ネットワークの事例が教育、研究、研究・教育機関のセッションに分かれて紹介された。教育交流としては、いくつかの専攻でサマースクールやウインタースクールが実施されているが、その中で湯川氏が高く評価するのが、KEK主催の「String Winter School」。中国、インド、韓国、台湾のアジア諸国だけでなく、欧米からの参加も含めて毎年130人余りの学生を集めて盛大に開かれている。その成功の秘訣は、各国に組織委員会が分散しており、持ち回りで会場を移動させていることと、世界第一級の講師を招き世界最高のスクールをめざしていることだ。

また、総研大における最先端研究を発表する分科会「社会と脳科学」「極限環境が切り拓く新しい自然科学」「e-learningを

活用した遠隔地教育」「アジアの視点による、環境・エネルギー問題」が開催され、若手研究者も加わって多面的な議論が交わされた。

夕食後は、「博士号取得者のキャリアについて」と「ネットワークの構築」の2つのグループに分かれて自由討論が行われた。さらに、ポスターセッション、パネルディスカッションなど、盛りだくさんのプログラムであった。

IT技術が進んだことで、バーチャルなネットワークを構築することは容易になってきたが、その基盤になるのは人と人相互の信頼関係である。

湯川氏は総括して、「人的ネットワークを確実にするため、今後も3年に1回くらいの開催を予定している。次回は、ネットワークがある程度構築されたことを前提にして、そのネットワークから何らかの成果をめざすようにしたい」と抱負を語る。修了生と学生のネットワーク、学生と学生のネットワーク、海外に開かれたネットワークなど、さまざまなネットワークが確かに根を下ろしていくのを見守りたい。

(取材・構成 塚崎朝子)





**ハ・テフンさん**  
HaTaeHoon  
USTで医学物理学を専攻  
学生会では広報・渉外を担当

われは草の根的に直接学部生に働きかけようとしている」。

総研大には約半分の専攻に院生会があるが、全学を横断する組織はない。両大学の交流事業における学生受け入れの中心となった国立天文台の有本信雄教授は、「こうした学生の自主性は、総研大とは大きな違いで、開学の初期エネルギーが持続しているようだ。われわれも学部どころは多い」と賞賛する。

#### UST学生には経済的サポート

ハさんは他大学も受験したが、将来

政府機関で働きたいとの希望があり、大型の研究に取り組みたいと考えていた。USTでの研究は、理論に加えて、研究フィールドを重視していることは魅力だった。さらに、決め手になったのは、USTの学生には経済的にサポートがあることだ。授業料が免除されるのではなく、所属機関によって学生に給与が支給され、そこから授業料を支払うという仕組みだという。韓国でも修士号や博士号を取った学生の就職は厳しいため、近年は大学院進学者は減少しているが、こうした効果もあってUSTの志望者は増え

ている。学位取得者が始めてまだ2年しか経っていないが、その大半は日本やアメリカでポスドクをしているという。

韓国の男子学生は、一般に学部時代に兵役に服すため、学業の中断という大きな試練を味わうことになる。ハさんは大学時代、2年2カ月大学を休学して、兵役に就いた。特に科学技術の分野では日進月歩の領域も多く、復学後はまた1から学び直すなくてはいけない。学問的に最も知識欲が旺盛なときに研究を中断されることも厳しいハンディだ。しかしハさんは、「理系の学生は、他の国の同年



オフィシャルな交流会で、総研大の専攻を紹介しているところ。左列が総研大生、右列がUST学生。

齢の学生に比べて45年の遅れがあると感じる。その分、プライドや情熱が強まり、忍耐強さも身につけている」と力強く語った。

USTは現在、新しい本部ビルを建築中であり、2010年に落成するのを記念して、総研大と合同で、記念の国際シンポジウムを開催することも計画されている。交流はさらに深まるものと予想される。

松本さんは、USTの学生の一体感に大いに触発された。「総研大でも、他専攻の学生との間で連携を取るため、まず、ブログなどのコミュニケーションツールを作ることを計画している」と語る。それが学生会の下地となり、対外的な交流の窓口へと育っていくことが期待される。

最も近い隣国は、最良のパートナーであると同時に最大のライバルでもある。

両国の天文台が、お互いの電波望遠鏡をセットにして干渉計として活用しているように、適度に遠くて近い関係にある。「同じ領域では切磋琢磨して成果を競い合うが、研究室を一步出れば敵も味方もない。ノーサイドです」

(取材・構成 塚崎朝子)

## パネルディスカッション 総研大生が望むネットワーク、修了生が望むネットワーク

国際シンポジウムの最終日、総研大修了生、在学生在が総研大 学術ネットワークの構築に何を求めているのか、パネルディスカッションの形で意見交換が行われた。パネリストとして立ったのは、修了生のソルヴァン（加藤）比呂子さん（オスロ大学病院、統計科学専攻）と中島秀樹さん（タイの放射光研究機関、物質構造科学専攻）が、在学生のアバイ・ディシュパンデ（Abhay Deshpande、加速器科学専攻）さんと総研大・広報担当助教の眞山聡さん（天文科学専攻）であった。

修了生2人はともに海外で職を得ている。ソルヴァンさんは、自分のもっている学術ネットワークを広げていくことは、キャリアパス開拓の強力な戦略となると述べた。現在のポストも、自らが構築した国際的ネットワークを通して獲得したという。中島さんは自分が進めている研究プロジェクトを紹介し、社会との接点をどのように求めていくべきか、社会とどう向き合えばいいのか、社会との間をつなぐネットワークの構築について問題提起を行った。

また、インドからの留学生であるアバイさんは、国際的な修了生ネットワークの構築を呼びかけた。修了生ネットワークを確立すれば、各国に散らばる修了生が総研大生を受け入れたら、総研大に自分の学生を送り込むことによって、総研大の国際的学術ネットワークの構築につながる。大学が組織的にネットワーク構築をバックアップしてくれるのであれば、心強いと語った。

総研大では現在、修了生ネットワークの構築に着手している。眞山聡さんはその仕事に取り組んでおり、今回の国際シンポジウムの実施委員を務めた。眞山さんは、「修了生にとって、総研大は巨大な学術ネットワークのハブのようなもの。総研大にはこれまでOB・OG会のような組織がなく、修了生と大学の間

の公式的なつながりがなかった。学生から大学への要望を伝える組織もなかった。今後は、在 student と修了生がいっしょになってネットワークを構築していくべきであろう」と提案した。

フロアからは、オンライン上で利用できる、ソーシャルネットワークサービスや掲示板などを利用して修了生ネットワークを構築すべきだという意見や、修了生・在 student ・教員が共通で利用できる総研大のメールアドレスを作ってはどうかという提案があった。また、対面での交流の重要性についても議論された。その中で、セミナーのような公式的な会合だけでなく、ゆるやかな活動の中で結びつきを深めていくことが望ましいという提案に拍手があがった。

今回のパネルディスカッションを通して感じられたのは、トップダウンでネットワークのハードだけを構築するのではなく、一人ひとりが草の根で輪を広げていくことの大切さであった。

(執筆 奥本素子)



大田では、USTの基盤であるKASI（天文科学専攻）を見学した。入り口には1993年万博のマスコットが飾られている（左の写真）。右の写真は衛星搭載カメラの説明を受けているところ。

**松本尚子さん**  
Naoko Matsumoto  
総研大・天文科学専攻



「ICTを利用した在学生・修了生ネットワークの構築」を提案する藤原一毅さん（情報学専攻）。